令和4年度 学校評価総括表

五條市立五條東小学校

	「つながり」を大切に　自ら未来を切り拓いていく児童の育成	総合評価
運　営　方　針	○『CONNECT×NEXT～人をおもう、みんながつながる～』を合い言葉に、強い使命感をもった教職員集団で、子どもたちに「予測不可能な時代を生き抜く力」を育てる。 ○ 保護者・地域と学校が双方向で協力し合える学校づくりを通して地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。	B

令和3年度の成果と課題	指導の重点	
○論理国語研究に取り組むことで言葉にこだわる児童の姿が見られるようになった。 ○総合的な学習の4つのサイクルを意識することで「必然性」のある課題を設定して取組を進めることができた。 ○異学年交流やエンカウンター等の取組によって「周りから受け止められている」「力を合わせることは大切だ」という情操を育むことができた。 ○ハッスルキッズや外遊びチャレンジ等、運動に楽しく取り組む機会を設け、意欲を高めることができた。 ○職員間で定期的に児童の課題を共有し、組織的に対応することで、ほとんどの児童が学校生活を肯定的にとらえるようになった。 ●論理国語についての知見を深め、「読解力」の一層の向上を図っていく。 ●読書を楽しいと感じられる環境をより充実させていく。 ●ルーブリックを用いた指導と評価の一体化を進める。 ●各学年の取組について交流する機会を設定していく。 ●地域のフィールドワーク研修等を実施し、ふるさと学習の充実を図る。 ●保護者の協力を得ながら、アウトメディアへの取組を進めていく。	○『論理国語』を手立てとした確かな読解力の育成	知
	○多くの言葉に出会うための読書活動の推進	
	○自ら進んで学習と向き合おうとする主体性の醸成	
	○自己を見つめ直し他者を思いやる心の育成	徳
	○多岐にわたる体験活動を通した協調・協働性の育成	
	○地域と繋がり誇りに思えるふるさと学習の充実	
	○運動習慣の定着による基礎体力の向上	体
	○発達に応じた保健指導による基本的生活習慣の定着	
	○豊かな関係作りによるレジリエンスの強化	

評価項目	具体的目標（評価小項目）	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
知	A 『論理国語』を手立てとした確かな読解力の育成	『論理国語』を基盤とした文章の内容を論理的に理解させる指導を推進することで，児童の読解力を育成する。また国語の授業を構成する要素（音読・板書・発問等）の研究を進めることで，教員としての見識を深め，「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す。学力調査において，県平均を上回るポイントを獲得する。	B	B	国語科における児童の課題や教師の疑問を解決するためのマニュアル『東小スタンダード2022』を策定し，これを活用することでで論理国語の研究を進めることができた。学力調査で県平均を上回ったのは記述式問題のみであり，今後も研修を継続していくと共に，課題を多面的に分析する必要がある。	A 「読解力の向上」に向けた研究の継続・深化。児童の非認知能力における課題の分析。 B 図書室の環境を整えて、意欲付けをする。（蔵書数の増加、空間の改善） 学級担任が読書への声かけや意欲付けをする。 語彙力の測り方を検討する必要がある。	・校内の掲示物や学校環境の様子から、様々に工夫した実践が充実して展開されていることがうかがえる。 ・読書活動に力を入れ、活発に取組んでいることがよく分かった。多くの活動がある学校生活の中で、読書時間を確保するのは難しいと思うが、児童がゆっくりと本に親しめる環境を大切にしてほしい。
	B 多くの言葉に出会うための読書活動の推進	今年度も継続して読み聞かせを行い、読むことの楽しさを実感できるようにする。また、図書室に選書コーナーを設け、子どもたちにおすすめリストを配布し活用するなど、幅広い種類の本に触れる環境作りをする。そして、子どもたちの語彙や読書量を増加させる。読書をして新しい言葉を知ることができたと答える児童70%を目指す。	B		選書コーナーを設置したことで、本を選ぶことが苦手な児童が選べるようになってきた。しかし、多くの取り組みを行ったが、語彙や読書量を増加させることにつながりにくかった。イベントをしている期間は図書室に行くが、それ以外の期間は図書室に行かない児童が多かった。		
	C 自ら進んで学習と向き合おうとする主体性の醸成	自主学習において、担任から児童の頑張りをコメントで評価したり、校内での自主学掲示をしたりするなど自主学習の充実を図る。また、日頃の挨拶や図工の作品を校長や教頭から表彰してもらう等の自己有用感を高める取組を行うことで、主体的に学習に取り組む児童を育成する。学校で学んだり遊んだりすることが楽しいと思う児童90%以上を目指す。	A		自主学習に主体的に学習に取り組む児童が増えた。また、挨拶賞や図工賞など普段褒められる機会の少ない児童にも全校の前で表彰される機会があり、自己有用感の高まりを感じた。児童アンケートにおいても97%が学校が楽しいと回答している。		
徳	D 自己を見つめ直し他者を思いやる心の育成	達成感を味わうことができる活動を多く設定することにより、自己肯定感を醸成するとともに、「傾聴」「対話」を大切にした道徳教育や豊かな体験活動を推進し、思いやりの心を育成する。自分にはよいところがあると思う児童80%以上を目指す。	B	B	自分にはよいところがあると思う児童は81%であったが、自信をもって言える児童の割合は45%であった。自主学習を主とした自己有用感高揚の取組では効果が見られたが、よいところを認め合う機会をもっと意図的に設定していく必要がある。思いやりの心をもっている児童は多いが、来年度の統合に向けて、さらに育てていきたい。	D 達成感を味わうことができる活動やよいところを認め合う機会を意図的に設定する。 E 行事などが重ならないように計画する。 F 学習内容を次年度に引き継ぐ。（記録を残す、地域フィールドワーク研修を行う）	・新たな統合に際し、下準備に大変な労力があると思うが、環境が変化することへの子どもたちの不安が解消されるような取組や働きかけをお願いしたい。 ・「五條東カルタ」は、統合を見据えて3つの地域の内容が網羅されていることが分かった。これを活用して、地域の学びを充実させてほしい。
	E 多岐にわたる体験活動を通した協調・協働性の育成	学級活動・学校行事・クラブ活動・委員会活動・集会活動などの学級内外の特別活動を充実させ、同学年または異学年間で協力することの大切さを実感させる。年齢を問わず友達と力を合わせることは大切だと思える児童90%以上を目指す。	A		特別活動や東っこ集会を充実させたことで98%の児童に「クラスやほかの学年の友達と力を合わせることが大切だと」感じさせることができた。自主学習の交流やふるさと学習の交流など、学年ごとの取り組みも成果として現れていた。取り組みが増えすぎて負担とならないよう、精選しながら続けていく必要がある。		
	F 地域と繋がり誇りに思えるふるさと学習の充実	ふるさと学習の推進や、地域ボランティアの方々との持続的な関わりによって、児童が地域との繋がりを実感し、地域の魅力を発信する活動などを通して、自分の住む地域を好きだと思う児童85%以上を目指す。	B		アンケートでは、概ね五條市のことを好意的に捉えている。（「好きになった」87%、「自慢したい」80%）地域の魅力を知り、ふるさとを大切にしようとする心が育ってきた。しかし、子どもの意欲付けに不可欠なゲストティーチャーや地域の人と繋がる機会が、移動手段の制限やコロナ禍により減少している。また、ふるさと学習の取り組み内容を共有する機会が少なかった。		
体	G 運動習慣の定着による基礎体力の向上	運動能力や興味・関心に沿ったハッスルキッズ、外遊びチャレンジの実施・校内表彰等を通して運動が好きな児童を育成する。また、体力測定の結果をもとに児童の体力・運動能力の課題を明確にし、系統だった体力・運動能力向上に取り組む。各学年5種目以上で県平均を上回ることを目指す。	A	B	・各学年5種目以上で県平均を上回る結果となった。 ・児童アンケートから87%の児童が進んで運動したり遊んだりしていると回答した。 ・学期に1回の外遊びチャレンジを楽しみに待つ姿や表彰のためにがんばる姿が見られた。 ・体力測定の結果から柔軟性に課題が見られた。	G 授業始めの東っ子体操とストレッチを交互に実施することを考える。 I 集会で行う内容などを精選する。	・ほとんどの項目の達成率が評価指標80%を上回っていることから、取組が十分な成果を出していると考える。
	H 発達に応じた保健指導による基本的生活習慣の定着	基本的生活習慣を確立するため、生活調べを活用して、保護者の積極的な協力を得ながら自身の生活習慣を振り返る機会をもつことと共に、発達課題に応じた学習内容を取り入れていくことで「早寝・早起き・朝ご飯」の項目において達成率85%以上を目指す。	B		生活調べを通して、自身の生活について振り返ることができた。一方で、家庭での生活状況に二極化が見られる。また、児童のSNS使用時間が増加している。本年度同様来年度もゲーム機器やSNSの適切な使用について家庭と連携しながら伝えていく機会をもつことが必要である。		
	I 豊かな関係作りによるレジリエンスの強化	学級活動では、主体的な話し合いやエンカウンターを行い、安心できる集団づくりに努める。また、異学年での活動の中で自尊感情が高められるような「東っ子集会」などの集会活動を充実させる。「自分はみんなを大切にしている」、「自分はみんなに大切にされている」と感じる児童それぞれ90%以上を目指す。	B		学級活動や東っこ集会を充実させたことで、安心できる集団作りを進めることができた。「自分はみんなを大切にしている」児童は95%「自分はみんなに大切にされている」児童は88%と肯定的な回答が多かった。依然として自尊感情が低い児童もいるので、学級活動などをさらに充実させ活躍の場を増やし自信につなげていきたい。		
学校運営	J 学園構想に基づいた小中一貫教育の推進	来年度の小中一貫教育全面実施に向け，グランドデザインの策定を完遂させる。また全教職員の協働により，キャリア教育年間指導計画や東部学園キャリアパスポート等を作成する。さらに先行実施として，2小1中の児童生徒合同で「挨拶運動」「ボランティア活動」「オリジナルキャラクター作成」を行う。	A	A	今年度計画していた具体的方策は全て完遂することができた。3校の小中一貫教育推進Co.が中心となって作成した「五條東部学園小中一貫教育パンフレット」は，地域・保護者に配布することで教育内容の周知や連携を図った。今年度策定したものを基に，五條東部学園の小中一貫教育を円滑に進めていきたい。	今年度策定した内容に基づき，五條東部学園の小中一貫教育を円滑に進めていく。	・充実したパンフレットが作成されたことによって、五條東部学園の理念や意義が具体的によく分かった。各自治会を通して地域の各家庭に回覧されるとのことでありがたい。
	K 業務の効率化による働き方改革の推進	校務支援システム等のICT環境を整備し、業務の効率化を図る。コストパフォーマンスの観点から活動を見直し、精選する。付随作業にかかる時間を短縮するための情報を発信する。施錠目標を設定し、意識改革を行う。これらの取り組みを行う中で、残業時間を月平均2時間減らす。	B		校務支援システム等のICT環境の整備や、会議の持ち方の改善、働き方改革に向けた発信などの業務の効率化を行うことで、残業時間を月平均約2時間30分削減することができた。しかし、もともとの残業時間が多かったため、さらなる削減が必要である。また、担当や分掌などによって、一部の先生は残業時間が削減されていないといった課題もあった。残業時間自体は削減されているが、家庭に持ち帰って仕事をしている人もいる。	・環境の整備や業務の見直しをさらに進める。 ・業務が偏らないように担当や分掌の配置を行う。 ・支援し合える体制作りをさらに進める。	

今年度の成果と次年度への課題	【成果】 ○国語科指導マニュアル策定によって教員共通理解のもと研究が進む。 ○選書コーナー設置や本に親しむための様々な企画を実施することができた。 ○自主学習コメント評価や表彰の機会により主体的に取り組む児童が増加。 ○異学年交流や集会活動の充実により、繋がり合う関係が育まれた。 ○体力テスト5種目以上で県平均を上回る。外遊びチャレンジに積極的に参加。 ○小中一貫教育開始に向けての諸計画完遂。パンフレットによる地域への周知ができた。 ○ICT環境整備等による業務改善により残業時間月平均2時間30分削減。	【課題】 ●「読解力の向上」に向けた研究を継続・深化させる。非認知能力における課題の分析を。 ●読書量の増加や五位獲得には担任の働きかけが必要。語彙の測り方要検討。 ●集会行事等、活動が増えすぎて負担にならないよう留意。 ●ふるさと学習の取組内容を全体で共有し、次年度に引き継いでいく。 ●家庭生活状況の二極化、SNS使用時間増加が課題。家庭との連携が必要。 ●五條東部学園の小中一貫教育を、策定した内容に基づいて円滑に進めていく。 ●担当や分掌により業務の負担が偏らないような配置と支え合える体制作りを。